

物理論文

令和6年9月9日

黒田 毅

時間と存在と空間への考察

時間は必ず変化であり、その共有性は時間の一定性を与えるものである。存在は変化を有し、変化はプラスとマイナスのバランスが、 $1/h$ の揺らぎにおいて存在すると考える。これがビックバンの形成への新しい仮説である。空間はその維持をバランスにおいて有すると考える。これはエネルギーの飽和性が空間を可能とするという仮説である。これらはビックバンへの考察であり、ビックバン以前の現実への考察なのである。変化のない現実がバランスの崩壊において宇宙の形成を与えたとする仮説を提起するものである。また空間の維持は、空間を維持する張力の形成を基盤とするならば、ビックバンにおいて放出されたエネルギーがこれを飽和し、空間の形成と拡大においてその限界点を有すると考えることができるのである。またこれらエネルギー量は一定であり、その普遍性とエネルギー保存の法則における変化を永続するものであると定義するものである。これら変化はゼロバランスの崩壊における $1/h$ の揺らぎがこれを永遠とすると考えるものである。また放出されるエネルギー量は、そのビックバン以前の世界への考察を可能とできるものである。またこれら現実への共有性は、アインシュタインの特殊相対性理論と相対性理論が全ての説明を可能として与えると考える。

時間への考察は、光のスピードでの移動が時間をゼロとするという定説を基盤とし、 $E=mc^2$ という変化性は、 $m=c^2/E$ という定説において、時間の定義を提起するものである。これら共有の変化が時間の連続性と定義するものである。またビックバンがエネルギーの放出であるならば、 $m=c^2/E$ は全ての物理現実の形成への定説であると定義できるのである。これらがエネルギーの凝縮性における初期宇宙における全ての物理現実の創造と形成であると仮設するものである。空間の形成と拡大は、時間の形成と空間の飽和における現実であると認識するものである。これらは、物理的の変化が現実の維持を与えるという仮説を生むものであり、これらはエネルギーの変化であり、全てエネルギー保存の法則において維持されるものであると考える。

またビックバンにおけるエネルギーの放出が、ゼロバランスの崩壊であるという仮説と、そのエネルギーの放出が一定数のエネルギーであるという仮説において、ビックバン以前の世界への考察を提起するものである。これらはバランスの崩壊は $1/h$ の揺らぎという現実を生むと仮定するのである。この揺らぎが全ての変化を永続する原因であると考えられることは

可能なのである。これら全ての変化はゼロバランスの崩壊が、揺らぎを生み、歴史の全ての変化の形成を与えることは仮説できるものなのである。

これは電子の公転と陽子の存在に対する考察は、 $1/h$ という揺らぎ、すなわちアンバランスにおいてこれらが形成されると考えることができるのである。

またエネルギーの凝縮が物理現実の構築を与えることは、ビックバンと空間の拡大の過程とともに、 c 光速度の形成と素粒子運動における物理現実の構築への考察を $m=c^2/E$ において定義できるものである。

また、ビックバンと宇宙の形成が、これらエネルギー保存の法則とバランスの形成において存在することは、個別素粒子からマクロ現実の形成まで、ビックバンがバランスの崩壊におけるゼロの崩壊と空間の拡大と物理運動であると考えることにおいて、 $1/h$ 揺らぎという揺らぎがすべての物理運動の永続性を与えるとは仮定できるのである。

また、ビックバンが、ゼロのバランス崩壊における定数のエネルギーと空間の形成であるならば、 $m=c^2/E$ という定式が、 $1/h$ の揺らぎとともに、すべてのエネルギーの凝縮とエネルギー保存の法則において数学的な定式における物質の形成を与えると考えることができる。そして数学的な現実の解明は、始まりから今日まで、それが完全に存在すると定義できるのである。これらは世界はバランスの維持を有し、エネルギー保存の法則を法として行うと考えることができるのである。

これはビックバン以前の世界とビックバンにおけるエネルギー量、空間の大きさ、その全ては数値化し、説明することができることを意味するものであり、これらは唯一バランスという絶対性を有し、存在すると考えることができるのである。これらはゼロという絶対バランスが $1/h$ の揺らぎとともに宇宙の存在を有することの定義なのである。